

論文の内容の要旨

論文題目「親の保育参画促進におけるコミュニティ形成過程と
子育ての心理に対する影響」

学位申請者 尾近千鶴

キーワード：核家族化、子育てを学ぶ場、保育参画、
コミュニティ、親自身の成長

本論文は、保育参画を効果的に実現している保育園（以下、園）の事例に着目し、親の保育参画を促進する具体的な仕組みとその影響や効果を明らかにしたものである。

昨今、都市化により地縁が希薄化し、地域コミュニティでの交流の機会が減少している。また、核家族化が進んでいることから、親兄弟といった血縁からの扶助が受けにくくなっている。そのため、子育て世代の孤立・孤独化の傾向が進み、心理的負担や不安からくるストレス、虐待などが社会問題となっている。心身の不調の深刻化を防ぐため、さらには予防的な観点から子育て環境の質の向上が望まれる。

子育て環境の変容、家族のつながりの変化、共働き世帯の増加などに対し、心理社会的側面から問題解決に向けた方策が必要である。そこで、人間の集団である社会の諸問題について注目すると同時に他者とのコミュニケーションを行う個人の心に注目したアプローチから、問題解決に向けた方策を検討する。

我が国においては、親は保育サービスの利用者、支援の対象とみなされる。通常、ほとんどの園は保護者へ保育サービスを提供する形で実施されている。共働き世帯の増加により、保育施設の利用者は増加し、保護者から保育職への乳幼児期の子育て支援のニーズは高くなっている。他方、近年の海外での研究から、親が主体的に保育の企画・運営に携わる「保育参画」という実践によって、他の親との協働を通じて子育てを学び、親自身の抱えるストレスや心理的な負担を軽減し、子育て環境の質の向上に繋がることが明らかにされた。我が国において、子育てについて学ぶ場が求められると示唆され、子育ての当事者である親が運営するプレイセンター、幼稚園における研究が報告されるようになり、親が集い、学び、助け合う経験は、良好な子育て環境環境の醸成を促すことが示唆された。我が国において親協同保育の可能性を検討する時期にきているといえる。このように積極的な意義を有しているものの、保育園を対象とした「保育参画」に関する先行研究はほぼ見当たらない。

そこで本研究では、親の保育参画に半世紀近い長い歴史と実績を持ち、職員・保護者・園児の間に独自の関係を構築し、保育を展開している保育園（以下「A保育園」）を先行事例として取り上げる。そこにおいて「保育参画」の仕組みがどのように形成され維持されているのか、親の心理的負担の軽減にとどまらない影響や効果について明らかにする。

本論文は2部構成で、以下について探究し論証した。第1部では、保育参画をめぐる状況と親の保育参画促進の意義について論じた。第2部では、保育園での観察及びインタビュー調査にて、保育参画の仕組みの形成と維持、その影響や効果、親の心理的負担の軽減の要因について質的研究であるKJ法を用いて分析と検証を行った。

各章において、序章では、親の保育参画をめぐる問題を提起した。第1章では、幼児教育と保育の成り立ちから、幼保一元化までを論じた。第2章では、親の子育てに関する心理的負担感と幼児教育や保育へのニーズについて論じた。第3章では、幼児教育・保育の背景と親の関わりについて概観した。第4章では、親の保育参画促進の重要性とその意義について論じた。第5章では、本論文の目的と、依拠する研究方法を概観し、質的研究におけるインタビュー調査とKJ法を分析方法として選択した理由について論じた。第6章では、親の保育参画を促進することによって、親の子育てについてどのような変化が生じ、何が変わっていくとよいか、保育参画の必要性に基づき、その仕組みと状況の変化に焦点化し探求した。園長はじめ保育士に対するインタビュー調査の結果を質的研究でのKJ法を用いた分析により、保育参画促進の仕組みの形成と維持について新たな発想を得るため検証し、理論構築を試みた。

保育士は園長からの保育参画促進と仕組み作りを受け、子育てに関する窓口と親同士の仲間作りの橋渡し役と集う場の提供を担っていたことが明らかとなった。既存の援助システムには見られない部分を補う新たな側面として、保育士が子育てを学ぶ場として保育参画促進の役目をし、親という非専門家の能動的な参加、主体的なピアサポートの協力体制作りに変化していく過程が確認された。

第7章では、保育参画による親への影響や効果について焦点化し、保育参画には、どのような影響や効果があるのかを探求した。

親への単独・グループインタビュー調査から、質的研究でのKJ法を用いた分析により、保育参画による影響と効果、親の心理的負担の軽減を生み出している要因について新たな発想を得るため検証し、理論構築を試みた。

保育参画と就労との兼ね合いによる時間的な困難さや葛藤はあるものの、子育ての学びの場でマネジメントし協力体制をとる親同士が子育てのコミュニティを形成し、そのメンバーとして協働しながら、ピアサポーターとしてお互いに弱さや強みを出し合うことで、負担と折り合いをつけ乗り越えていた。親は子育てを学び、保育士・親仲間とともに豊かな保育環境を創り出し、子どもの成長を喜びあい、親自身も成長するなど、人と環境の適合状態であるポジティブな側面が確認された。

終章では、保育参画促進を質的研究から導き出した意味、概念を秩序づけ論じた。A保育園における就労と保育参画のマネジメントの先行事例として、保育参画の実践から「子育てを学ぶ場で保育士や他の親と関わることで、子どもの成長への安心感を得て、親自身の成長を見いだすことができる」とした。今後の課題として、幼保一元化以前から親が保育参画をした1事例であることから、他の保育施設での再現可能性に向けた「保育参画導入モデル」の検討と、あらゆる背景を持つ子育て世代が保育に関われる可能性を高めるための支援体制構築への働きかけの必要性が挙げられる。